

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2005-2008  
 課題番号：17520154  
 研究課題名（和文） ダーウィニズム以後の英米のユートピア文学に関する新歴史主義的研究  
 研究課題名（英文） A New Historical Approach to Post-Darwinian British and American Utopian Literature  
 研究代表者  
 丹治 陽子（TANJI YOKO）  
 国立大学法人横浜国立大学・教育人間科学部・教授  
 研究者番号：90188459

## 研究成果の概要：

この時代の社会主義的ユートピアの代表作としてのエドワード・ベラミの『かえりみれば（*Looking Backward*）』（1888）と、同じくフェミニスト・ユートピアの代表作である C・P・ギルマンの『女の国（*Herland*）』（1915）を、ダーウィンの著作と関連させながら読解することをおして、この時代のユートピアの特徴として、「歴史の終焉」としてのユートピアがいかなる闘争の果てに成立してきたかを明らかにし、そのうえで闘争の欠如したユートピアがふたたび進歩の動因として闘争を導入していくプロセスを概観した。それをおして、ダーウィン以後のユートピアニズムの不可能性を明らかにした。

## 交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	1,400,000	0	1,400,000
2006 年度	600,000	0	600,000
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
総計	3,500,000	450,000	3,950,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：ダーウィニズム、ユートピア、新歴史主義、エドワード・ベラミ、『かえりみれば』、C・P・ギルマン、『女の国』

## 1. 研究開始当初の背景

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、英米におけるユートピア文学に影響をあたえた思想としては、(1) ダーウィニズム、(2) 社会主義、そして (3) フェミニズムがあげられよう。

このうち、社会主義とユートピアニズムについては、Vincent Geoghegan, *Utopianism and Marxism* (1987) があり、フェミニズムとユートピアニズムについては、ed. Carol

Farley Kessler, *Daring to Dream: Utopian Fiction by United States Women Before 1950* (1995), Darby Lewes, *Dream Revisionaries: Gender and Genre in women's Utopian fiction* (1995) がある。

しかし、ダーウィニズムとユートピアニズムについては、一般的言及は数かぎりなくある割には、そしてそのなかには Frank E. Manuel and Fritzie P. Manuel, *Utopian Thought in The Western World* (1979) のよ

うなすぐれた研究がないわけではないが、ダーウィンの著作を具体的に読解したうえでの実証的かつ学際的な新歴史主義的研究は乏しい。

そのような研究状況のなかで、本研究はダーウィニズムとユートピアニズムの関係を新歴史主義的に追究することをめざすものである。

## 2. 研究の目的

進化が進歩と混同されていた 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけての思想的状況のなかで、進化論としてのダーウィニズムは陰に陽にユートピアニズムに大きな影響をあたえていた。しかしその一方で、進化の要因としての生存闘争の必要性を主張するダーウィニズムと、闘争の歴史の終焉を前提とするユートピアニズムははたして相容れるものなのか。本研究はそのような問いに答えることによって、この時代のユートピアニズムの特質のひとつを、ダーウィニズムとの関連において明らかにすることをめざす。

より具体的には、この時代の社会主義的ユートピアの代表作としてのエドワード・ベラミの『かえりみれば (*Looking Backward*)』(1888) と、同じくフェミニスト・ユートピアの代表作である C・P・ギルマンの『女の国 (*Herland*)』(1915) の読解をとおして、このふたつのユートピア小説において、「歴史の終焉」としてのユートピアがいかなる闘争の果てに成立してきたかを明らかにし、そのうえで闘争の欠如したユートピアがふたたび進歩の動因として闘争を導入していくプロセスを概観する。

## 3. 研究の方法

本研究の学術的な特徴としては、学際的かつ歴史主義的な研究方法にある。

そもそも 19 世紀後半から 20 世紀前半にかけて、英米においてユートピア文学が流行した理由としては、産業革命以降の科学技術（予防医学、公衆衛生をふくむ）のめざましい発展があげられるが、そのほかにも、(1) ダーウィニズム、(2) マルクス主義的共産主義あるいはフェビアン社会主義などの社会主義、そして (3) フェミニズム、といったさまざまな思想的な分野からの大きな影響力が見逃せない。したがって本研究は、文学作品のみならず、歴史的テキスト、思想的テキストを横断的に研究する学際的なユートピア研究をめざす。

そういうものとしての本研究は、トマス・モア『ユートピア』以降の英語圏におけるユートピア文学の伝統を視野におさめる通時的な研究であるよりも、19 世紀後半から 20 世紀前半の文学・歴史・思想にまたがるユ-

トピアニズムを、その同時代的コンテクストのなかで理解しようとする歴史主義的研究でもあることをめざす。その時代のテキスト全体を、ひとつの同時代的インターテキストと見なし（「新歴史主義的」研究と名づけるゆえんである）、そのなかでとくにダーウィニズムとユートピアニズムの関係を学際的に検討していくことをめざすものである。なかでもダーウィンの著作がとくに重要であることは言うまでもない。

## 4. 研究成果

ユートピアとは、言うまでもなくトマス・モアの造語として、「実在しない場所 (ou-topia=no place)」であり、また、「理想的な場所 (eu-topia=good place)」ということでもある。それは理想の実現した完璧な世界として一種の静的なたたずまいをもっている。というのはユートピアとは、ユートピアの実現にむけた闘争の歴史が終わったときはじめて出現する、欠けたところのない「理想的な場所」だからである。要するに、ユートピアとはひとつの完成された世界として「歴史の終焉」を意味している。ロジャー・リー・エマソンがユートピアの特質のひとつを、「歴史が無視されている永遠の静止社会」と定義しているのは、同様なことを意味しているだろう。

ユートピアが「歴史の終焉」を意味していることは、19 世紀後半の階級闘争の歴史が終息し「秩序と平等と幸福の楽園」と形容される一種の社会主義の実現がえがかれている『かえりみれば』の社会主義的ユートピアにおいて明らかであるばかりでなく、地域の隔絶が起こって以降 2000 年の時間のなかで姉妹愛の世界を実現した『女の国』のフェミニスト・ユートピアにおいてもあてはまる。

「女の国」のユートピアが成立した歴史的経緯は『女の国』第 5 章に記されている。

西暦紀元のところ、このあたりには奴隷制をともなった一夫多妻制を採用する部族が住んでいた。そこに戦争が起こり、多くの人びとが死んだが、生き残った人びとは奥地に退いて生きることになった。そこに今度は火山の爆発が起こって地震が発生、それによって奥地から海岸線におりてくる唯一の道がふさがるとともに、その場所に土地の隆起が起こり、外界と遮断される世界ができあがった。

不幸なことに、男性のほとんどが加わっていた軍隊は、隆起した土地の下敷きになって壊滅。生き残った男性といえば、ほとんど奴隷と子どものみだったが、この混乱に乗じて奴隷たちは反乱を起こし、自分たち以外の、男の子をふくむ生き残った男性のすべて、および年輩の女性を殺害し、みずから支配者になる。しかしそこで若い女性が残忍な元奴隷の支配者にたいして立ち上がり、かつて女奴

隷だった者をのぞいて彼らを滅ぼしてしまう。こうして、奴隷の反乱と女性の蜂起という闘争の歴史をへて、女性だけの世界があらわれるのである。

女性だけが残された世界のなかで、女性たちは生存のために土地を耕して農業をはじめ。しかし子どもが生まれないうちで、その協同生活はいつか終わってしまうだろう。ところが、「5年か10年」がたったときひとつの奇跡が起こる。ひとりの若い女性が単為生殖（処女生殖）によって、すなわち女性だけの性によって子どもを産んだのである。

「新しい必要という圧力」のもとで「未知の力」が発達してきたということなのである。

その後も、単為生殖というこの「未知の力」のおかげで同じ女性から4人の子どもが生まれる。合計5人であるが、そのすべてが女性である。彼女たちは成長し、今度は彼女たち自身が「未来の母」となり、それぞれ5人ずつの女子を出産する。そしてその25人の女性も、また5人ずつの女子を——という次第で、第4世代までに155名の「新しい人種 (a new race)」が誕生することになったのである。

その後も同じ30年に5倍という割合で「新しい人種」が増えつづけていく。その結果として、あらゆるユートピアが必然的に孕まざるをえない問題が、「女の国」というフェミニズム・ユートピアを襲うことになる。それは、人口の問題である。

そして国が人でいっぱいになってきた。30年ごとに人口が5倍になれば、ほどなく限界に達してしまう。とくにこういう小さな国においてはなおさらだろう。[中略]

しかし、どんなことをしようと、まもなく彼女たちは「人口の圧力」という問題に、じつに深刻なかたちで直面することになった。人口の過剰が生じ、それとともに不可避免的に生活水準の低下が起こった。

このユートピアの第一の歴史的転換期が、女性が単為生殖というかたちで子孫を増やしはじめたときだったとすれば、第二の転換期は、限られた土地から産出される食糧の量にたいする人口が飽和の段階に達したときだったのである。

チャールズ・ダーウィン、そしてダーウィンとともに「自然選択」による「進化」論——ダーウィニズム——の主唱者となったA. R. ウォレスが、彼ら共同のアイデアを別々に思いついた契機となったのは、ともにマルサスの『人口論』を読んだことだったと言われていた。生産される食糧に比して人口が過剰になれば、そこに必然的に食糧を奪いあう「生存闘争」が起きるからである。それが「女の国」でも起こったのである。

この女たちはそれにどう対処したのだろうか。

「生存闘争」によって、ではなかった。そうした闘争は結局、たがいに他より抜き出ようとする育ちのよくない人びとに、永遠の苦しみをもたらすことになるだけだろう。何人かがトップに出ることはある、それも一時的に。しかし大多数は絶えず押しつぶされ、貧者と墮落した者からなるみじめな下層集団を形成する。そして誰にも静かな平和は訪れることなく、人びとのあいだにほんとうに高貴な資質が育つ可能性もない。[中略]

そんなことをするかわりに、会議を開いて、とことん考えぬいた。彼女たちはひじょうに明晰な思考力の持ち主だったのだ。「わたしたちが要求する平和や快適さや健康や美しさや進歩の水準を保ったまま、この国が許容できるのは、最大限の努力をして、これこれの人数です。いいでしょう。では、その数を、この国の人数としましょう」

彼女たちは母親だったが、しかし国土、あらゆる土地を、いっぱいにあるいは過剰に満たし、そのあげくに自分の子が苦しみ、罪を犯し、たがいに戦いながら死んでいくのを見ることになる、意志をもたないみじめな母親ではない。彼女たちは自覚的に国民を創造する母親だ。彼女たちにとって、母性愛は野蛮な情熱でも、たんなる「本能」でも、まったく個人的な感情でもなく、一種の宗教だったのだ。

意識的に出産をコントロールする方法を見いだした「女の国」の住民たちは、ひとりの女性がひとりの子どもだけを出産することによって、「人口のバランス」を確保するようになっていたのである。その結果、「混雑」がなく、「日当たりも風通しもいい自由さがいたるところに存在している」この国には、「生存闘争」ではなく、姉妹愛の原理——「姉妹愛の限りない感情、奉仕における幅広い一体性——が支配するユートピアが生まれたのである。

奴隷だった支配者を打ち倒し、自分たちだけの姉妹愛の世界を形成し、集約農業のシステムをつくりあげる一方で出産をコントロールすることで人口過剰を回避するという歴史的なプロセスのあとで、「女の国」の女性たちは、生存闘争から自由になったユートピアを創造したのである。このユートピアの特質は、それを訪れた3人の男性のうちでもっとも反フェミニズム的なテリー・ニコルソンによっていみじくも指摘されている。

「人生は闘争 (struggle) だ。そうでな

ければならない」と彼は言い張った。「もし闘争がなければ、そこに人生はない。それだけのことだ」

「それはナンセンスだ。男性的なたわごとだ」と平和主義者のジェフは答えた。彼は「女の国」の熱烈な弁護者となっていた。

「アリは闘争によって多数を養っているわけではないだろう。ハチはどうだい？」

「昆虫にもどってアリ塚に住みたいというなら話はべつさ。生物がより高等になっていくのは闘争によってなんだ。闘い (combat) によってなんだ。だけどここにはドラマがない。あいつらの劇を見ているがいい。うんざりだ」

その点はそのとおりだった。この国の演劇は、われわれの趣味からいえば、退屈なものだった。彼女たちは性的動機を欠いているから、嫉妬もない。敵対する国どうしの交渉もない。貴族制もなければ、それにまつわる野心もない。富める者と貧しい者の対立もない」

女性しかいない「女の国」は、両性のあいだの「闘争」が終息しているだけではなく、国家間の「闘争」も、階級間の「闘争」もない、その意味で「歴史の終焉」以後の世界にほかならない。これこそがこのユートピアの本質的特質なのである。

しかし問題はここからである。闘争の終息は、ダーウィニズム以後の思想空間のなかで、ひとつの不安、すなわち退化 (degeneration) の不安とむすびつくものだったからである。

「生物がより高等になっていくのは闘争によってなんだ」というニコルソンの言葉、あるいは「自然の法則は生存闘争を要求しており、その闘争のなかでは生存最適者が生き残り、不適者が滅びる」という「ぼく」の言葉は、たとえばダーウィンは『人間の由来』のなかの言葉と反響しあっている。

人間も他の動物と同じく、きっと急速な増殖の結果の生存闘争を経て、今の高度な現状にまで前進してきたのである。これからもさらに高いところへ前進しようとするなら、なお厳しい闘争に従事しつづけなければならないのだということを気にすべきである。そうでないと人間は怠惰に沈み、人生の戦いにおいて、より才能を与えられた人々が恵まれていない人々よりいい結果を出すとすることもなくなってしまふ。だからわれわれの自然な人口増加率は、たとえそれが多くの顕著な悪につながるとしても、けっして大きく下げはならない。

ダーウィンはマルサスの『人口論』から自然選択説の着想を得たということは前に述

べた。ちょうどそのマルサスの著作が18世紀末の啓蒙主義的ユートピアニズムに水をかけるものだったように、ダーウィニズムは19世紀末から20世紀にかけてのユートピアニズムに暗い影を投げかけるものだったのである。生物を人類のレベルまで高めてきたのが「生存闘争」だったとすれば、その闘争が終息してしまったこの時代のユートピアにはいったいなにが起こるのか。

このような人類退化の不安の文学的表現は、H. G. ウェルズの『タイムマシン』(1895)のなかにあらわれる未来人種「エロイ」だろう。ユートピアのなかに発見されるその「人類の黄昏」「人類の衰退期」の風景は、ダーウィニズム以後のユートピアの不可能性にかんするもっとも雄弁な表現にほかなるまい。ユートピアのなかには当然のことながら生存闘争が存在してはならないが、しかし闘争が存在しないかぎり、ユートピアは遅かれ早かれ退化の下降線をえがくことにならざるをえない……

このパラドックスこそ、ダーウィニズム以後のユートピアニズムがかならず孕まなければならないなくなったものであり、そこにユートピアの不可能性が暗示されているのである。

その結果、『女の国』は、最後にいたってエラドーを「ぼく」とともに女の国を脱出させることによって、「女の国」というユートピアを否定することになる。

「わたしはすべてを楽しむわ」と彼女は、希望に目を輝かせながら言った。「あなたの国がわたしたちの国と違うのはわかっています。ここの静かな生活があなた方にはどれほど単調に見え、あなた方の生活がどんなに刺激にみちたものか、わたしにはわかっています。それはあなたが前に話してくれた、第二の性が導入されたときの生物学的な変化のようなものにちがいありません。はるかに動きがあって、絶えず変化があって、新しい成長の可能性にみちていることでしょう。」

わたしは彼女に、性にかんする最新の生物学的理論を話したことがあった。だから彼女はふたつの性をもつことの優越性、男のいる世界の優越性を深く確信していたのだった。

単為生殖によって人口が維持されてきた「女の国」のなかでは、自然選択が働いて種の進化が起こっていくために必要な個体間の変異は、基本的に得られない。例外は突然変異であり、そのモチーフもこの作品には導入されているが、両性がそろっている種よりもはるかにそれが得られにくいのは確実だろう。したがって、種の進化の可能性とい

うことになれば、単為生殖によって人口を維持する「女の国」よりも、はるかに大きな変異を期待できる、両性のそろった社会のほうがすぐれた社会ということになる。

ここにおいて、「女の国」というユートピアと、それが批判しているはずの現実のアメリカ社会との関係は逆転することになる。批判される現実のアメリカはたしかにいろいろな面でユートピアに劣っているが、しかし「女の国」にはないひとつの長所もっているのである。すなわち、男女両性をそなえていることによる「動き」「変化」「新しい成長の可能性」である。こうして、「女の国」という単為生殖のユートピアは否定され、両性の生殖にもとづくシステムへの復帰を希求する方向が打ち出される。

闘争の終焉としての静的なユートピアは、闘争の欠如のゆえにユートピアではないという結末。ユートピアの本質的矛盾があらわれるこのような結末は、同じようにあらゆる闘争が終息している『かえりみれば』の社会主義的ユートピアにも訪れるものでもある。ここではその詳細を明らかにすることはできないが、おそらくはこのような結末は、たんにこのふたつのユートピアにとどまらず、ダーウィニズム以後のユートピアに共通する特徴として想定できるのではなかろうか。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 丹治陽子、「アメリカ的想像力における自然と都市——『シスター・キャリー』における自然主義的都市イメージの新しいさについて」、『横浜国立大学教育人間科学部紀要Ⅱ(人文科学)』No.8、P1-13、2006年、査読なし
- ② 丹治陽子、「アメリカ的想像力における都市」、『19世紀末英米文学における都市の表象に関する新歴史主義的研究(科学研究費補助金(基盤研究(B)(2))研究成果報告書)』、P70-86、2005年、査読なし

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

丹治 陽子 (TANJI YOKO)

国立大学法人横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号 90188459

(2)研究分担者  
なし

(3)連携研究者  
なし